

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12869

研究課題名（和文）日本書道史の「和様」に関する文献学的研究

研究課題名（英文）Philological Research on Wayo in the History of Japanese Calligraphy

研究代表者

柳田 さやか（YANAGIDA, Sayaka）

東京藝術大学・美術学部・助教

研究者番号：80811819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本近世の主な書論・近現代の書道史における「和様」の語の解釈を比較することにより、その解釈の変遷を検討した。近世においては、和様の解釈・和様の書流に対する立場は多様であるものの、御家流の祖で和漢に通じていた尊円親王の真跡は評価される傾向があった。また、日本の書を一概に和様・唐様と区別すること自体が理に合わないとする論は、近世から存在していたことが窺えた。明治期においては、文献考証を能くした国学者達が、『異制庭訓往来』を典拠として和様の形成期を平安中期と捉える動向があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、和様の書に関する文献学的調査が進み、和様の書に関する様式的研究を実証的におこなっていくことが可能となる。東アジアの書の歴史、ひいては書のグローバルヒストリーを構築していく上でも、他地域と比した日本の書の特徴という重要な課題を探る端緒となる。また、和様の語は美術諸分野において用いられると共に、和漢の関係性は日本文化史において欠くことのできない観点である。和様化の起点と特徴を分野横断的に検討していく点においても波及効果が期待される。

研究成果の概要（英文）：This study examines the changes in the interpretations of the term “Wayo” by comparing how it is interpreted in the main treatises on calligraphy from early modern period of Japan and in the history of modern and contemporary calligraphy. In the early modern period, interpretations of Wayo and positions on the Wayo school of calligraphy varied, but the authentic works of Prince Sonen, the founder of the Oieryu School, tended to be highly valued. Additionally, it can be observed that arguments suggesting it is irrational to categorically distinguish Japanese calligraphy into Wayo and Karayo have existed since the early modern period. During the Meiji period, there was a trend among kokugaku scholars proficient in documentary research to view the formative period of Wayo as the middle of Heian period, using “Isei Teikin Orai” as their source.

研究分野：書道史

キーワード：和様 書道史 書論 書学 芸術学

1. 研究開始当初の背景

現在の日本書道史において、一般的に「和様」の書は「日本風の書」を指し、平安中期の三跡が確立したとされる。この三跡のうち、特に小野道風が和様の礎を築き、藤原行成がそれを完成させたと言われることが多い。一方で、和様とは中近世の法性寺流・御家流等の書流を指すという解釈も普及している。その他に日本の書全般、仮名の書全般を指すという解釈も存在し、その解釈の多様性が窺えるところである。

書道史に関する先行文献において、和様の書の定義は漠然としており、具体的に示されていないと指摘されてきたものの、現在までその歴史的な考察はなされてこなかった。また、建築や彫刻等の美術諸分野において、和様の起点や特徴、様式が考察され始めているが、書についてはいまだ十分検討されていないといえよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の近世以降の主な書論、近現代の書道史における「和様」の語の解釈を比較することにより、その解釈の変遷を検討することである。まずは、現在見受けられる和様の解釈がいつどのように生じたのか、書道史編纂のなかで和様がどのように記述されてきたのかを捉えたい。

和様は美術諸分野において用いられる語である。特に建築史や彫刻史等では和様化に関する考察がおこなわれ、その特質が論じられている。また、例えば絵画において「やまと絵」や「漢画」、文学において「和歌」や「漢詩」の語があるように、和漢の関係性は日本文化史をみていく上で重要な観点である。和様の書の研究を通してみえてくるものは、日本美術史ひいては日本文化史に通底するものがあると想定される。

3. 研究の方法

(1) 近世の書論における考察

本研究の方法として、近世以降の主な書論、近現代の書道史のうち、特に和様・唐様を論じているものを取り上げて和様の解釈を比較することによって、和様に対する解釈の揺れや変遷、和様の書跡への評価を探る。

近世は和様書流とされる御家流が普及すると共に、唐様の書が興隆した時代といわれる。現在の書道史では、この時期の書家を唐様書家・和様書家に二分して語ることが多いが、当時の書家達が和様・唐様の関係をどのように捉えていたのかを再検討し、和様・唐様は必ずしも対立するものではなく、混成性が存在しているとの認識が当時からあったことを探る。また、御家流およびその祖とされる尊円親王に対して、書家達はどのような評価をしていたのかを検討する。

(2) 近代の書道史における考察

近代は歴史編纂が盛んとなり、日本書道史も明治期から編まれ始めるようになる。明治中期に書道史が概観され、大正期・昭和戦前期は日本書道史の単行本や図版集、全集が多く刊行されて、書道史形成がなされていく。このような時期において、「和様」の語がどのような意で使用されたのかを探る。また、和様の起点やその背景がどのように捉えられ、それがいつ主流な論調として普及したのかを考察する。特に、明治中期には文献考証を得意とした国学者達によって書道史が記述される。国学者達が和様の起点の根拠を何に求めたのかにも注目する。

4. 研究成果

(1) 近世の書論における考察

本項では近世の主な書論を通して、和様に対する解釈の揺れやその評価を検討した。以下、便宜的であるが一般的に唐様に位置付けられる書家達の論を抜粋していくと、貝原益軒は『和俗童子訓』において、「上代の能書」である三筆、三跡はいずれも「から流」に基づくとして評価している。当時の御家流を否定する一方、「近代の和流の内」、尊円親王の真跡は「からの筆法あり」として評価している。

沢田東江は『東江先生書話』の「日本の書中国と抗衡する話」の項において、日本古代の書法は中国晋唐の書法に基づいて優れていたものの、現在はその本を失っており、人々が用いている「流儀」は別体であるとした。

細井九皋は『墨道私言』において、日本は中古までは唐の書法を学んでいたため「格別に無俗

気」であったが、現在は「祐筆向」の「俗流」の書であると否定した。書には「唐様」と「日本様」の二種が元々あるわけではなく、本来はすべて唐様であるべきものであり、「本を取失ひたるを和流と思ふ也」との見解を示している。

萩野鳩谷は『学書捷徑』の「和様の説」の項において、文字を書くことに和漢の区別はなく、基本は同じものとしている。それを前提とした上で、和様は「字形」と「筆の滞らぬ」ことを重視して「柔らか」であることを貴び、唐様は「氣象筆意」を重視する点が特徴と記している。また、「和様書札の説」の項においては、和様は「衰への至極」であるが、元来の尊円親王は「肉多き」ものであり、それが「段々と伝え誤て出来たる事」との考えを表明している。

このように、中国の書に基づいた日本の書を肯定する一方、当時普及していた御家流の書は強く否定する傾向があった。三跡を唐様とする解釈も存在していたことが窺える。また、御家流の祖とされる尊円親王の真跡は評価する傾向がある。

続いて、和様に位置付けられる書家達の論を抜粋していくと、近衛家熙は『槐記』の享保12年の項において、書の「大根」は和様・唐様の区別がなく、上代の藤原佐理や藤原行成は和漢を共に能くしたと述べている。書というものは「筆意骨子は和漢ともに同く」、「手の風は人々に異也」としている。

森尹祥は『書道訓』において、日本の上古は「日本、唐と書体の差別なし」とし、魏晋の筆意を学んでいたが、「自然と日本の体裁」が生じたとした。尊円親王を能書と評価し、現在は質の悪い摸本を尊円の書として学んでいる現状があると述べている。和様を推す立場にありながら、当時の御家流を客観視しており、細井広沢のことも「よく勤めし者也」、「近比の博識也」と評価している点は注目される。

五十嵐篤好は『天朝墨談』の「唐様和様」の項において、日本の書はすべて唐様とも和様ともいえ、そもそも和様・唐様の区別はできないという考えを示している。また、「優美なる」を和様とし、「かどだちたる」を唐様とすることは論外と述べているが、この言及からはそのような論調が当時存在していた様相が窺える。尊円親王は王羲之を学んだ「真の唐様」であり、「真の和様」であるとしている。近衛家熙や森尹祥、五十嵐篤好の和様・唐様の区別の見解は、先の細井九皋や萩野鳩谷とも通じる側面がある。

以上をみると、近世における和様の解釈は多様でありながら、御家流を指し示す例が多い。書家達は御家流を否定／肯定するいずれの立場にあっても、和漢に通じていた尊円親王の真跡、平安時代の書の評価する側面があった。また、日本の書を和様・唐様と一概に区別すること自体が理に合わないとする解釈は、すでに近世より多く存在していたことが窺えた。日本の書全般を和様と捉える解釈も近世より存在していた。他方、日本の書全般を唐様と捉えた解釈もあり、この点は現在の書道史では見受けられない点である。

近世では和様と唐様の書の様式の差異に言及した書論もある。その一例として、貝原益軒は『和俗童子訓』において、「日本流」は「字形をかざる故、多くは字画ちがひ、無理なる事多し」として、「字画」の違いに言及している。萩野鳩谷は『学書捷徑』において、「和流」は「字体に誤多し」、「字体を正すには、和漢通じ考へて其誤を改たむ」として、「字体」の違いを指摘した。このような書の様式の差異の実際については、今後、書跡と文献の両面から探っていきたい課題である。

(2) 近代の書道史における考察

本項では時代順に書道史を整理することを通して、和様の解釈の変遷を検討した。以下、主な編者の論を抜粋していくと、井上政次郎は『学芸志林』第99冊17巻の「書法沿革」において、引用文献を都度記しながら書の大勢を説こうとした。「和様」の語は使用しておらず、三跡のうち藤原行成が「自機」を出して「入木道ノ創護」、「入木道相承テ大祖」となったと位置付けている。文字には真名と仮名があり、和歌を書くために草体がさらに「柔力」になったという歴史的経緯を論じていることが特徴である。

関根正直は『皇典講究所講演』第30号掲載の講演録において、「草仮字といふ文字を創し、一種の風を書きそめしより(中略)風姿神韻を存する者あるに至れり」とするものを「謂ゆる和様」とし、仮名の成立と関連させながら和様を説明した。「村上天皇の御時頃より、和漢漸く書風を異にし、紀貫之を始め(中略)盛に草仮字を書き創め、とりどり一種の書風あり」とし、和漢の書風が異なる頃の起点を「村上天皇の御時頃」としている。また、この平安中期の和様と「近世寺子屋流俗の和様とは異なり」とも記している。

小野鷲堂は『書法大意』において、「和様の紀元」を「小野道風や紀貫之等」とし、漢字と仮名を「混和」して和様の風致が生じたと論じている。一方、寺子屋で学ぶ書も和様とするが「俗様」と位置付けている。和様・唐様は「上世に此別なし」とし、「風土人情」によって「其間おのつから意匠の差ある」とするものの、「相對して呼称するには、其間大に徑庭あるが如し」、「相親しまざる跡の見ゆるは、下れる世の弊としもいふべきなり」と結論付け、和様・唐様を相對して呼称することに異を唱えている。また、「和様」の呼称の始まりについては、近世に唐様書家が和様を非難して「相對して、此呼称をはしめたるならめ」としている。

小杉榎邨は『大日本美術史』において、文献典拠を示しながら書の沿革を記述した。『入木抄』の「入木一芸本朝異朝に越たる事」、「異制庭訓往来」の「本朝延暦大同之昔者、和漢同其芳躅、天曆天喜之頃、和漢異其闔域」を明示し、「実にその景迹をよくいひ尽したる」と評している。小野道風の「新機軸」はこの「和漢闔域」を異にした所以であり、『入木抄』の「道風が跡を模

すといへども、又聊か我様を書出せり」の記述は藤原行成の「本朝様」の沿革を証するに足る談柄であるとした。また、尊円親王は「上代の様」を存すと評価する一方、後世の御家流は「其風体大にいやしくなりもて来つる事、これも人皆よく知れり」としている。

横井時冬は『大日本能書伝』において、小杉楹邨と同じく『異制庭訓往来』の「和漢異其園城」の部分引用し、「よくいひつくされたり」としている。この『異制庭訓往来』を典拠としつつ、空海や橘逸勢は「純然たる唐風」であるが、「道風以下は稍々自ら我国の風を開けり」、「佐理行成に至りては、益々我邦一種の風を成し」と記述している。

このように、明治期から編まれ始めた書道史においては、「和様」の語を用いるか否かについての差異はあるが、平安中期の和様の起点とその背景を論じる例が多くなっていく。特に文献考証を能くした国学者達は文献典拠を明示しながら書道史を編んでおり、和様の起点は『異制庭訓往来』を典拠としながら論じていた。

明治40年代は吉川弘文館の『国史大辞典』、三省堂の『日本百科大辞典』が刊行され、書道史の概観が整理された。特に『国史大辞典』では、空海と橘逸勢は「唐風」、小野道風が「我国の風」を開き、藤原佐理と藤原行成はそれを「益々成す」とする論を採っており、現在の一般的な解釈に近い。なお、中世に関する記述では「和様」の語を用いず、近世に関する記述では「和様」の語を用いて使い分けている点は、先述の小杉楹邨達と同様である。この使い分けは、近世書論や現在の書道史とは異なる点で、「本朝様」や「本朝の風」、「国風」等の語を使用していた中世書論を典拠として書道史を編んでいるためと考えられる。

昭和初期には日本書道史の単著が多く刊行されるようになり、特に奥山錦洞の『日本書道史』、藤原鶴來の『和漢書道史』は多くの版を重ねた。奥山錦洞は前代の解釈を継承し、「平安朝の書道は、小野道風、藤原佐理、藤原行成に至つて、唐風を脱して、茲に純然たる本朝様を樹立した」とし、小野道風が「本朝様を開いた」とした。「和様の諸流」として持明院流や加茂流、御家流等を挙げ、尊円親王は「書体豊麗にして円味を帯び、一種の典型を有して、習ふに易き書体、書くに楽な書風であつたので、大いに普及した」としつつ、後代に「俗悪の体に陥つて」としている。一方の藤原鶴來は、和様生成は風土や遣唐使廃止の影響によるもので、「和様の先駆」を小野道風、「和様の祖」を三跡とした。この奥山と藤原に共通する点は、和様・唐様を対立するものと捉えている点で、現在の通説に少なからず影響を与えていると考えられる。

同時期に平凡社より刊行された『書道全集』において、尾上柴舟は「和様書道史」を記述し、和様を日本の書全般を意味する語として使用した。その一方、『和様概説』においては、三跡の書を語る際に「いわゆる和様」としている。和様生成は国民性、日本的気風、和歌の興隆、散文の発展を背景とし、貞観年間から延喜年間の空海や橘逸勢の頃から始まっているとし、遂に日本化したのは天曆年間から寛弘年間としている。尾上は和様化を示す具体的な書跡名の言及もおこなっており、「桂本万葉集」において漢字と仮名が不調和をきたしていない点、小野道風の「屏風土代」、「玉泉帖」において日本的意識の顕著なものが完成した点を指摘している。

以後、昭和10年代までは様々な書道史の記述が見受けられるが、例えば鈴木翠軒や野本白雲は、尾上柴舟と同じく和様の萌芽は三筆時代にあるとしつつ、和様の大成者を小野道風と位置付けている。また、その後には春名好重と吉澤義則は、正倉院文書の「止」、「保」等の文字が中国に例のない独特の崩し方で、奈良時代から日本人らしさがすでに発生しているとしている。

以上のように、明治期から昭和初期にかけて、平安中期の三跡の書を和様とすると共に、御家流等の書流も和様とする論調が主流となったことが窺える。昭和初期以降は、徐々に書道史学が発展していき、平安初期あるいは奈良時代から和様化がすでに始まるとする説も生じていくこととなった。近代においては、和様・唐様の在り方が相対化されながら、上記の論調が書道史として整理されていったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柳田さやか	4. 巻 29
2. 論文標題 明治期編纂の書道史における「和様」形成期の典拠 『異制庭訓往来』を中心として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本教育大学協会全国書道教育部門 研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳田さやか	4. 巻 28
2. 論文標題 日本書道史における「和様」の多義性 近世書論の比較検討を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育大学協会全国書道教育部門 研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳田さやか
2. 発表標題 日本書道史における「和様」の多義性 近世書論の比較検討を通して
3. 学会等名 第37回全国大学書道学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柳田さやか
2. 発表標題 日本書道史における「和様」概念とその課題
3. 学会等名 第38回書論書道史研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------